老人ホームの人々

山城5回　磯崎　清

特別養護老人ホームで高齢者の多くは、沈黙の日々を送っている。勿論、介護や行事・クラブ時に職員の声掛けの機会はあるが、予め高齢者とのコミュニケーションの時間は用意されていない。また、高齢者同志の心を開いた会話は期待できない。

この度、オンブズマンが施設に入り、高齢者から苦情を聞くためにまずやらねばならないことは、寡黙な高齢者に口を開いてもらい、コミュニケーションを重ねていくことである。しばらく高齢者と話し合って見えてきたものは、高齢者一人一人がたくましく、したたかに生きている姿であり、その一挙一動に感動を覚えることすらある。

さてここで、はたと俳句に思い当たった。毎月投句の七句と老人ホームの夏の感動を詠んでみようと思い付いたのである。

そもそも冷暖房完備の老人ホームに、季節感を生命とする俳句を持ち込むことは、なかなかむずかしいことなのかも知れな

い。そのせいか、今まで老人ホームの風景を詠んだ俳句にあまりお目に掛かったことがない。このことも、老人ホームの句にあえて挑戦しようとした理由の一つである。

苦吟の末の二十句から、私なりに納得したものを選んでここに紹介する。

口癖は「住めば都」やサングラス

利用者には、「何から何までしてもらって結構なことです」「言いたいことは何もありません」と施設での生活を満足げに話される方が多い。オンブズマンとしては、そのまま受け取っていいのか慎重に見極めなければならない瞬間である。

死に場所は施設と決めて柏餅

「ここを我が家のようにおもっている」と語っていたA氏は、医師の癌告知にも入院を拒み、施設で看護を受けながら、まもなく亡くなった。これほど施設に愛着をもっている人がいるのかと感動を覚えるとともに、施設側のターミナルケア体制が問われていると思った。

艶歌や白寿の夏の証しとぞ

B氏は、目と耳と足が悪いと言いながら、補聴器を付け、車

椅子を操ってフロアを駆け巡る。ある日巡回中のオンブズマンの二人を呼び止め、昔の艶歌を立て続けに三曲も歌った。しかも気持ち良さそうに、歌詞はいささかききとりにくかったが、その記憶力には恐れ入った。

退屈と言ってみただけ金魚玉

右手・右足の都合が悪いというC氏は、「退屈だ、何か遊び道具があれば」と言う。なるほど退屈な人がいてもおかしくないと妙に納得する、家にいても退屈な人はいるのだから。金魚をガラスの丸い容器に入れた「金魚玉」でも軒端に吊って眺めるか。ひょっとすると、金魚も同じ心境かも。

夏燕望めば帰心たかぶれる

一時外泊は入所契約書にあり、制度的にも認められているが、「帰りたい」すなわち退所したいという人がいてもおかしくない、元々好きで入った訳ではないのだ。ある日車椅子の男性が近づいてきて、「帰して呉れるか」と言い、オンブズマンが躊躇していると。さっと消えてしまった。言いにくいことをよくぞ言ってくれたという思いはあるが、オンブズマンの手に負えず歯がゆい思いをした。

リハビリの愚直の汗や歩数計

Dさんは、脚の衰えを防ぐ為に毎日階段を、手摺りにつかまりながら五回上り下りしていると言う。その顔が輝いている。

目の不自由なEさんからある日、同じように脚の劣えをふせぐために毎日散歩したいとの要望を聞いた。本人に念を押した上、施設側に伝えたところ、介護サービス計画書に毎日十分、職員が付き添っての歩行練習が組み込まれた。オンブズマンの最初の成果として忘れがたい出来事ではあるが、反面入所時のアセスメント、ケアプランが十分であったのか、と思わずにはいられなかった。

チャンネルは党首討論白団扇

テレビは、食堂の大型テレビを見る人、自室の小さなテレビを見る人、いろいろであるが、利用者の見る番組は何か。勿論時代劇の時間に食堂に集まってくる人も多いが、意外とニュースや国会中継に見入っている人も少なくない。

老いてなほますらをたらむ武具飾る

「武具」とは端午の節句に飾られる武者人形のことで、五月には武者人形がかざられ、その前でお年寄りが歓談する風景が

みられる。「三つ子の魂百まで」ではないが、いくつになっても男は「ますらを」でありたい。

また、十二月のクリスマスにはサンタクロースが現れ、靴下に入ったプレゼントが配られる。このように、それぞれの時期に相応しい行事が行われる。また、華道・絵画・などのクラブ活動も活発である。ベッドサイドで絵筆を握っている利用者も見掛けるし、カラオケの歌詞を枕の下にしのばせている人もいる。施設で生活している利用者とて、社会と断絶して息を殺して暮らしているわけではなく、われわれの暮らしの延長線上をしたたかに生きているのである。

お迎えの来るの来ないの神無月

お年寄りとの会話でよくでてくる言葉の一つが「お迎え」である。「お迎えが早く来てほしいのに中々来てくれない」との訴えが多い。又、三年したらお迎えが来る、親がその年で亡くなったから」という人もいる。「お迎え」というのは「死をオブラートに包んだような言葉で、聞く方もこの方が助かるが、それに関わっていくのがしんどいので、軽く流してしまいがちである。もう少し語り手の死生観に関わっていけたらと思う。

茶話のほうけて来たり虎落笛

茶飲み話が弾んでいる内に、急に現実離れした、例えば誰かに何かをぬすまれたというような、話しになることがある。そして、やっとこのお年寄りは痴呆性高齢者だと分かる。その時のオンブズマンの気持ちは曰くいいがたい。「虎落笛（もがりぶえ）」とは、冬の烈風が柵や竹垣に吹き付けて笛のような音を発するのをいうが、少しオーバーにいえばそんな「虎落笛」のただなかに投げ出された感じがする。

枕辺に三味線ある暮らし小六月

Aさんは、見掛けない顔である。話しを聞くと民謡教室の師匠をしていたという。指差された壁には三味線が立て掛けてある。「カラオケの時間には、何でも弾ける。今度はオンブズマンさんも歌ってね」という。三味線さえあればどんな苦難も乗り越えられるという面構えである。

外出は子に付き添はれふぐと汁

Bさんとその息子夫婦が職員と楽しそうに話している。息子さんに聞いてみると「母のリクエストで繁華街まで出て河豚料理を食べて来た」という。Bさんはカラオケもお花もやり、満

ち足りた余生を送っている。

団欒を見て見ぬ振りの懐手

隣のベッドでお年寄りとその息子の嫁が仲むつまじく話しているのを横目に、Cさんはベッドに座ったまま俯いている。自分の家族はなかなか来てくれないと呟く。居合わせたオンブズマンは、思わず「私たちが話しに来てるじゃないの」と言ってしまう。個室ならこんな思いはしないで済むのにと思った。

赤い羽根つけて孤高の顔たもつ

Dさんが胸に赤い羽根をつけている。事務所の横に募金箱が置いてあるという。

Dさんは毎日階段の上がり下りを欠かさないし、お花などのクラブにも出て自立した毎日を過ごしている。しかし、周りと仲良くしようとはせず、いつも孤高を保っている。或いはそれがDさん流の四人部屋での身の処し方なのかも知れない。

日々無為も心静に生身魂

E氏は、新顔である。声を掛けると、「何も不自由はない。退屈だが、自然に日は立っていく」とここでの日々を達観したような口振り。「生身魂」とは、盆に父母や目上の人などの長

命を祈ってその生御魂をもてなす風習があり、そのお年寄りのこと。

運動会帽子の下に顔がある

小春日の一日施設の運動会が催された。園庭にテントがはられ、万国旗が賑々しい。お年寄りは、各フロア毎に赤、緑、黄、青の襷やリボンをつけて、それぞれのテントの下に入っている。入り切れない人は大きな麦藁帽子を被っている。施設長の挨拶の後、各組代表が前に出て宣誓、いよいよ大運動会の始まりだ。仮装行列もある。昼飯は仕出し屋の握り飯。お年寄りが美味そうに頬張っている。

山城２回　森貞男